

4.2 特殊関数とライブラリ 最適値問題(2)

ver. 0.1

制約条件なしの最小化(実際には極小化)問題では、QNewton という組込み関数を使います。使い方は、eqSolve の設定にきわめて似ています。今、次のような 2 変数の関数の極小を求めます。

$$h(x_1, x_2) = x_1^3 + x_2^3 - 9x_1x_2 + 27$$

まず最初に、qnewtonset;で QNewton のグローバル変数の設定を初期化します。関数定義の f n で 2 変数の関数を定義します。その際インデックスには x [1]と x [2]を使います。そして、スタートベクトル、ここでは 2 変数ですから、2 × 1 のベクトル x 0 を設定してから組込み関数 QNewton で、その引数で、関数 h をそれを指し示すポインターを表す & のマークをつけて呼び出して、スタートベクトルとあわせて、代入して関数 h が最小となるベクトル(x₁, x₂)を計算します。(なお、qnewtonset;と QNewton の命令は、call で呼び出しでも、そのまま命令としておいても結果は同じになります。ここでは、一貫性を保つため graphset;などと同様に、qnewtonset;はそのまま命令を置く形をとることにします。ただし、QNewton を call なしにそのまま書くと、余分なリターンが羅列されて、同じ答えやベクトル、リターンコードが 2 回違った形で現れることになります。)

プログラム

```
new; cls;
qnewtonset;
fn h(x)=x[1]^3+x[2]^3-9*x[1]*x[2]+27;
x0={0,0};
call QNewton(&h,x0);
```

画面表示

return code = 0

normal convergence

Value of objective function 27.000000

Parameters	Estimates	Gradient

P01	0.0000	0.0000
P02	0.0000	0.0000

Number of iterations 1

Minutes to convergence 0.00000

上のように、リターンコードが 0 になっていれば、一応、計算は成功したと言えます。こ

の場合、 $(x_1, x_2) = (0, 0)$ のとき、 $h(x_1, x_2) = 27$ となるという意味です。ただし、上を見て明らかなように、iteration が 1 回きりです。ただ、gradient ベクトルが最初から零ベクトルですから、gradient ベクトルを零ベクトルにするように動きようがなく、ここは極値にはちがいはないのですが、なにかおかしいということになります。そこで iterarion が 1 回きりであることを避けるためにスタートベクトルを $(0, 0)$ から少しずらしてやりましょう。たとえば $(1, 1)$ としてやりましょう(この設定は、任意でかまいません)。いま、iteration をすべて表示する設定に下のグローバル変数

```
_qn_PrintIters=0;
```

をデフォルトの 0 (各 iteration を表示しない) から、1 の表示するに変更します。

プログラム

```
new; cls;
qnewtonset;
fn h(x)=x[1]^3+x[2]^3-9*x[1]*x[2]+27;
x0={1,1};
_qn_PrintIters=1;
call QNewton(&h,x0);
```

画面表示

```
step length      1.0000000
```

```
-----
iter 1           function =    16.18399988
```

```
-----
parameter      direction      gradient      relative gradient
      1.3         0.30000001     -6.6299998     0.53256302
      1.3         0.30000001     -6.6299998     0.53256302
```

```
step length      1.0000000
```

```
-----
iter 2           function =    10.68797099
```

```
-----
parameter      direction      gradient      relative gradient
1.7096639       0.40966386     -6.6181231     1.0586449
1.7096639       0.40966386     -6.6181231     1.0586449
```

step length 0.01000000

iter 3 function = 10.81970396

parameter	direction	gradient	relative gradient
3.9924521	228.27882	11.886953	4.3862651
3.9924521	228.27882	11.886953	4.3862651

step length 1.0000000

iter 4 function = 1.80854329

parameter	direction	gradient	relative gradient
2.5260763	-1.4663758	-3.5915028	5.0164185
2.5260763	-1.4663758	-3.5915025	5.0164181

step length 1.0000000

iter 5 function = 0.15604856

parameter	direction	gradient	relative gradient
2.8663229	0.34024666	-1.149484	3.2947924
2.8663229	0.34024664	-1.149485	3.2947952

step length 1.0000000

iter 6 function = 0.00634819

parameter	direction	gradient	relative gradient
3.0264807	0.16015775	0.2404291	0.72765403
3.0264808	0.16015785	0.24043144	0.72766113

step length 1.0000000

iter 7 function = 0.00001347

parameter	direction	gradient	relative gradient
2.9987763	-0.027704358	-0.011007955	0.033010394
2.9987763	-0.027704483	-0.011008903	0.033013236

step length 1.0000000

iter 8 function = 0.00000000

parameter	direction	gradient	relative gradient
2.9999892	0.0012129207	-9.6634159e-005	0.00028990144
2.9999893	0.0012129759	-9.6160462e-005	0.00028848035

step length 1.0000000

iter 9 function = 0.00000000

parameter	direction	gradient	relative gradient
3	1.0730012e-005	4.7369516e-007	1.4210855e-006
3	1.0700453e-005	-4.7369517e-007	1.4210855e-006

return code = 0

normal convergence

Value of objective function 0.000000

Parameters Estimates Gradient

P01	3.0000	0.0000
P02	3.0000	0.0000

Number of iterations 9

Minutes to convergence 0.00083

今回も、リターンコード 0 でnormal convergenceとなっていますが、今度はiterationの回数が9回と複数回まわって正常にgradientベクトルが徐々に絶対値で小さくなって、およそ0の値に収束しています。これは、 $h(x_1, x_2) = x_1^3 + x_2^3 - 9x_1x_2 + 27$ が、(0,0)以外に(3,3)も極値になっていて、そのうち、(0,0)の方は鞍点、(3,3)が極小点になっているからです。したがって、(0,0)から少しでもはずれた地点からスタートすれば、(0,0)の鞍点ではなく、(3,3)の極小点に到達するようにiterationが行なわれるわけです。これは、

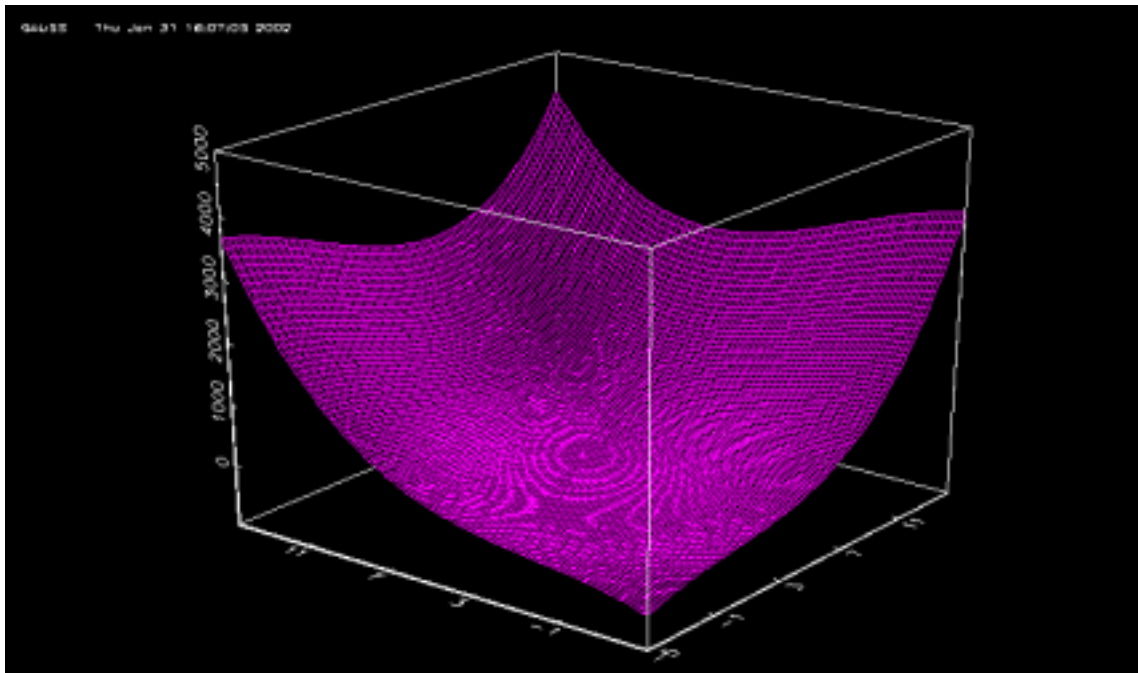
$$h_1 = 3x_1^2 - 9x_2, \quad h_2 = 3x_2^2 - 9x_1, \quad \begin{vmatrix} h_{11} & h_{12} \\ h_{21} & h_{22} \end{vmatrix} = \begin{vmatrix} 6x_1 & -9 \\ -9 & 6x_2 \end{vmatrix} = 36x_1x_2 - 81$$

となりますから、(0,0)と(3,3)の両者とも、1階の h_1 と h_2 は0になっていますが、2階の方は、(0,0)では0、-81で零、負、(3,3)では18と243で正、正になっていて、(0,0)の方は鞍点、(3,3)が極小点となります。これは、グラフ表示からも明らかです。

プログラム

```
new; cls;
library pgraph;
graphset;
x1=seqa(-5,0.2,99)'; x2=seqa(-5,0.2,99);
x=x1+zeros(99,1); y=x2+zeros(1,99);
z=x^3+y^3-9*x.*y+27*ones(99,99);
surface(x1,x2,z);
```

グラフ表示



プログラムにあるように、**contour**グラフなどを作るときには、第1節のグラフィックスのところでやりましたように、まずシークエンスを使ってx軸とy軸に相当するベクトルを作成したうえで、それらとベクトルの型が行と列が正反対になる零ベクトルを足し合わせることによって、 (x, y) の座標のxのところばかりの行列とyのところばかりの行列ができます。これらを、要素対要素の計算でかけ合わせたり足し合わせたりします。べき乗[^]はそれ自体が要素対要素計算ですからそのままでもいいでしょう。かけ算は要素対要素のドット・をつけた演算になります。それから定数項は、今作成している行列空間と同じディメンションの同じ数が入った定数項になりますから、定数 \times すべての要素が1の行列になります。上の例でいえば、 99×99 のディメンションになるように計算しています。(なお、 100×100 まではライト版のGAUSSで扱えます。Contourグラフの方が奇数の座標を要求しますから、ここではライト版でも動作するようにグラフの座標計算の区切りの数に99を採用しています。)

上のグラフのように、奥の高い(+, +)から一度くぼんでから、手前の(-, -)の方向に少し登ってから落ち込んでいます。(+, -)方向と(+, -)方向には左右対称に登っていて、谷になっています。さらに、x軸とy軸ともに - 1 から 4 の座標に限って、さらに限られた領域のcontourグラフを描くと、谷の底の周辺の等高線の状況がわかります。

プログラム

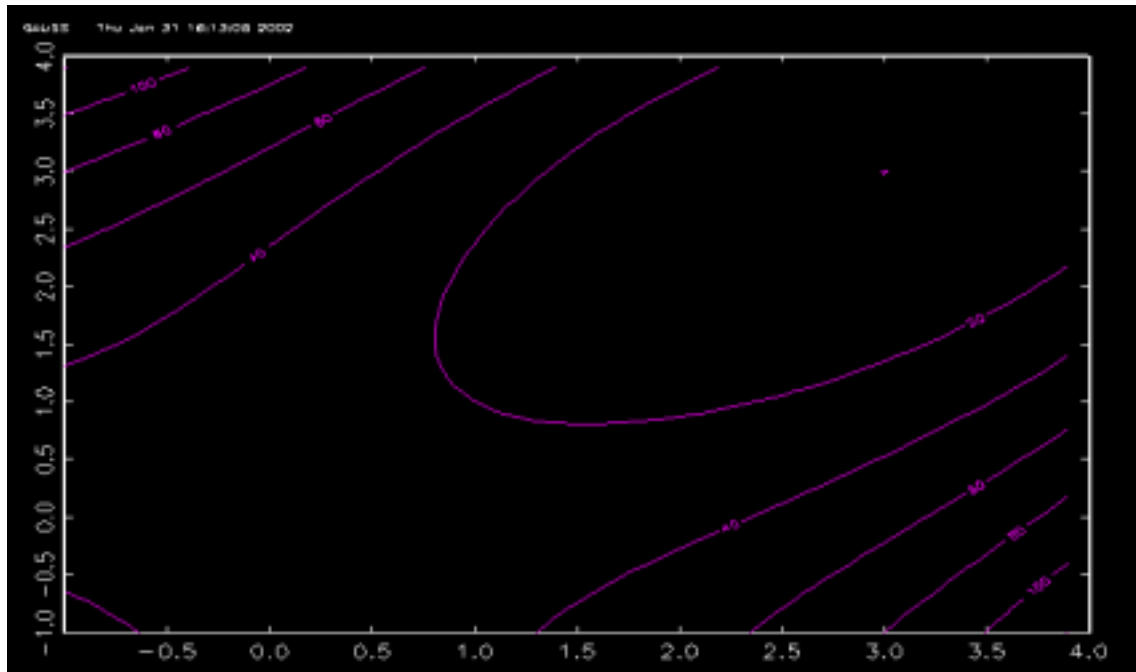
```
new; cls;  
library pgraph;  
graphset;  
x1=seqa(-1,0.05,99)'; x2=seqa(-1,0.05,99);
```

```

x=x1+zeros(99,1); y=x2+zeros(1,99);
z=x^3+y^3-9*x.*y+27*ones(99,99);
contour(x1,x2,z);

```

グラフ表示



上のように、明らかに(3,3)が極小値になっていて、左下の(-,-)の方向にいけば行く下り坂になりますから、極小値から左下の方向に移動していくと、左下の(0,0)のあたりで一度登って、そのあと下りになります。その(0,0)のあたりでは、依然として周囲はゆるやかな谷になっています。ということで、(0,0)の周辺は鞍点になっていることがわかります。

本題のQNewtonに話を戻しますと、eqSolveのときのように、グローバル変数の設定として、手計算の1階の微分を計算に加えて精度を高めることもできます。今、1階の微分の 2×1 の列ベクトル（行ベクトルではないので注意）の関数を j として、これをグローバル変数_qn_GradProcに&のポインターを表すしるしをつけて呼び出します。

プログラム

```

new; cls;
qnewtonset;
fn h(x)=x[1]^3+x[2]^3-9*x[1]*x[2]+27;
fn j(x)=(3*x[1]^2-9*x[2]) | (3*x[2]^2-9*x[1]);
x0={1,1};
_qn_GradProc=&j;
_qn_RelGradTol=1e-7;
QNewton(&h,x0);

```

画面表示

return code = 0

normal convergence

Value of objective function 0.000000

Parameters	Estimates	Gradient
P01	3.0000	0.0000
P02	3.0000	0.0000

Number of iterations 10

Minutes to convergence 0.00650

3.0000000

3.0000000

-1.4210855e-014

-1.4566126e-013

-1.4566126e-013

0.00000000

この場合は結果はほぼ同じになりが、直接命令でべた出力させると、**gradient**がさらに 0 に近い値になることがわかります。これは、**gradient**の**iteration**の計算の有効桁数を設定するグローバル変数

_qn_RelGradTol=1e-5;

を変更して、1e-7まで有効桁数を下げているためです。-1.4566126e-013の小数点以下7桁ですから $13 - (7 - 1) = 7$ で、デフォルトの小数点以下5桁ではなくて、小数点以下7桁よりも小さくなるまで**iteration**が続けられます。手計算の1階の微分のベクトルを加えたので、さらに計算精度をここでは上げています。繰り返しますが、1階の微分の関数を設定する際に、 1×2 の行ベクトルではなくて 2×1 の列ベクトルであることに注意してください。そういう意味で、垂直方向にマージする | の記号を使っています。

ただし、このQnewtonの方法にも問題があります。この関数は、上のグラフでもわかるように(-, -)の方向へはどんどん落ちていくような関数であって、QNewtonは極小値を求める関数であるため、もしスタートベクトルを(-, -)のどこかの点にとると永遠に下がり続

けて最小値を探しにいきます。今、プログラムを元のシンプルなものに戻して、iteration
の数を設定するグローバル変数

```
_qn_MaxIters=1e+5;
```

だけを用いて、1e+5のデフォルト値から少し増やして1e+6にでもしてやりましょう。なお
途中でiterationをリアルタイムで画面表示させるのには「P」のキーを押してください。ま
た、「C」のキーを押すとそこでiterationを打ち切ります。計算は、マシンの速さにも依存
しますが、かなりの時間を要します。Pのキーを押すと各iterationの画面表示に余計に時間
がかかって、さらに時間を要することになります。

プログラム

```
new; cls;  
qnewtonset;  
fn h(x)=x[1]^3+x[2]^3-9*x[1]*x[2]+27;  
x0={-1,-1};  
_qn_MaxIters=1e+6;  
call QNewton(&h,x0);
```

画面表示

```
return code =      2  
maximum number of iterations exceeded
```

Value of objective function -10392736603.908516

Parameters	Estimates	Gradient

P01	-1730.5759	9000254.1573
P02	-1730.5763	9000258.2088

Number of iterations 1000000

Minutes to convergence 4.99733

上のように、最小値を探しに行ってしまうと、どんどん(-,-)の小さな方向に行きます。そ
して、最終的に、iterationが1e+6回、すなわち1000000回行なったところで計算をやめて
そこでの結果を出してきます。リターンコードは、正常収束の0ではなくて、iterationが
その最大設定値を超えたというコードの2を返します。そして目的関数の値は、マイナ
スのかなり桁数のある数字になって、 x_1 と x_2 に相当するP01とP02も、ほぼ同じ数で、マイ

ナスの小さな数になっています。その地点のgradientは、当然のことながら、0とは違う数になっています。この場合の計算のやり直しは、スタートベクトルを取りかえるしか方法はありません。多少、不便ではありますが、このスタートベクトルを取りかえるという方法は、GAUSSのほかの関数や主なライブラリ関数に共通するものです。特に極値が1つ以上ある場合や、変曲点や鞍点などをもった関数にGAUSSの関数をあてはめて計算させる場合には、いくつかのスタートベクトルを試してみる作業が必ず必要になります。下にリターンコードの番号別の意味をしめしておきますと、

リターンコード

- 0 正常収束
- 1 強制終了
- 2 最大iteration回数超過
- 3 関数値計算失敗
- 4 gradient計算失敗
- 5 ステップの長さの計算失敗
- 6 初期値での関数が評価不能

のようになります。リターンコードが2だからといって、最大iteration数を大きく変更しても問題の解決にはならないことは、上に示したとおりです。call形式で呼び出すほかに、

```
{ x,f,g,retcode } = QNewton(&h,x0)
```

として書いても、call形式の呼び出しと同じ結果になります。ただし、これにより4つのリターンを取り出すことができ、自由に加工したり、別の計算や関数にこれらのリターン変数を受け渡すことができるようになります。なお、xは解のベクトル、fはxでの目的関数の最小値、gはgradientベクトル、recodeはリターンコードです。

これとは別に、ノンリニアのプログラミング、すなわち、非線型の制約条件付きの最小化(極小化)をする組込み関数として、sqpSolveが標準で用意されています。QNewtonで最初に用いて形状もすでにわかっている目的関数を使って、非線形の制約式や変数の変域を設定しなおして、あらためて計算しなおして見ましょう。まずは、下のように変更します。

$$\text{Min } h(x_1, x_2) = x_1^3 + x_2^3 - 9x_1x_2 + 27$$

$$\text{s.t. } x_1 = x_2$$

$$x_1^2 + x_2^2 \leq 8$$

$$x_1 \geq 0, x_2 \geq 0$$

プログラム

```
new; cls;
```

```
sqpSolveset;
```

```
fn h(x)=x[1]^3+x[2]^3-9*x[1]*x[2]+27;
```

```
fn eqc(x)=x[1]-x[2];
```

```
fn ineqc(x)=-x[1]^2-x[2]^2+8;
```

```
_sqp_EqProc=&eqc;
```

```
_sqp_IneqProc=&ineqc;
```

```
_sqp_Bounds={ 0 1e256,  
              0 1e256};
```

```
start={1,1};
```

```
call sqpSolve(&h,start);
```

画面表示

return code = 0

normal convergence

Value of objective function 7.000018

Parameters	Estimates
------------	-----------

P01	2.0000
-----	--------

P02	2.0000
-----	--------

Linear Equality Lagrangean Coefficients

.

Linear Inequality Lagrangean Coefficients

.

Nonlinear Equality Lagrangean Coefficients

3.6870063e-011

Nonlinear Inequality Lagrangean Coefficients

1.5000011

Bounds Lagrangean Coefficients

0.00000000	0.00000000
0.00000000	0.00000000

Number of iterations 6
Minutes to convergence 0.00000

上のように、ノンリニアの等号制約に、 $x_1 - x_2 - 0$ を定義した任意の関数`ineqc`を設定し
ノンリニア不等号制約には、不等号関係をひっくり返すのに -1 をかけた $-x_1^2 - x_2^2 + 8$
を定義した任意の関数`eqc`を設定します。(不等号制約の書式の向きは $> =$ の方向です。し
たがって、ひっくり返すために全体に -1 をかけています。) 上の設定のように、
`_sqp_EqProc`にはノンリニアの等号制約の関数のポインターが、`_sqp_IneqProc`にはノンリ
ニアの不等号制約($> =$)の関数のポインターがきます。その名前を指ししめすものとして記
号 `&` が関数名の前につけられて呼び出されています。変数のバウンダリーコンディション
には `_sqp_Bounds` というグローバル変数が使われて、この場合、2 つの変数とも 0 から無
限大までですから、

```
_sqp_Bounds={ 0 1e256,  
              0 1e256};
```

というぐあいに、1 行目が x_1 の変域を表し、2 行目が x_2 の変域を表すように設定します。
なお、無限大には `1e256`、無限小には `-1e256` を使います。

```
0 <= x1 <= 1e256  
0 <= x2 <= 1e256
```

デフォルトは、`_sqp_Bounds={ 0 1e256 }` となっていて、いくつ変数があっても同じ変域
であれば 1 行でまとめて設定できます。この `eqpSolve` も擬似ライブラリ的に `eqpSolveset`;
で、そのグローバル変数の設定値をクリアしてから計算をさせます。リニア制約でもノン
リニアとして扱っても一向に差し支えはありません。(2 次形式のプログラミング `QProg` と
同様に、リニア制約の行列およびベクトル `A, b, C, d` を別に設定することもできます。) この関
数の呼び方は他の最適値関係の関数と同じように、その引数に目的関数をポインターとし
て、スタートベクトルをとまって代入します。上の数値例の場合には、ルート 8 の半径
の円内で、ふたつの変数の値が同じで非負の変域で、グラフに描いた目的関数を最小化(極
小化)しています。もともとの極小点は (3,3) であったわけですが、今度は、円の内側である
制約がきいてきて、円の制約上の (2,2) で極小になっています。この `binding`、`non-binding`
の関係は、それぞれの制約のラグランジアンを見ることでわかります。この場合、ノンリ
ニアの不等号制約のラグランジアンが約 1.5 で 0 ではないことが、この制約上で極小値が決
まっていることを示しています。

なお、スタートベクトルを任意の(-, -)の値から始めるとQNewtonの結果から推測できるように、この目的関数は (0,0)から下降していくのですが、その(0,0)がboundaryになっているので、そこで止まるはずです。

画面結果

return code = 0

normal convergence

Value of objective function 27.000000

Parameters	Estimates
------------	-----------

P01	0.0000
-----	--------

P02	0.0000
-----	--------

Linear Equality Lagrangean Coefficients

.

Linear Inequality Lagrangean Coefficients

.

Nonlinear Equality Lagrangean Coefficients

0.00000000

Nonlinear Inequality Lagrangean Coefficients

0.00000000

Bounds Lagrangean Coefficients

0.00000000	0.00000000
------------	------------

0.00000000	0.00000000
------------	------------

Number of iterations 2

Minutes to convergence 0.00550

上のように、リターンコードも正常な0で、(0,0)になっています。しかしながら、以前の関数の値7と比べて、ここの27という数字は明らかに大きいので、前回の(2,2)での関数の

値 7 が最小値になります。ただし、前回の 7 という数字は、明らかに手計算で 7 なのですが、**gradient**、**Hessian**関係の計算誤差によって端数の小数第何位かから下は信頼性はありません。その場合には、手計算で、これらの値をグローバル変数として代入して、精度を上げることになります。(ただし、精度が上がる場合とそうでない場合があります。)

プログラム

```
new; cls;
sqpSolveset;

fn h(x)=x[1]^3+x[2]^3-9*x[1]*x[2]+27;
fn eqc(x)=x[1]-x[2];
fn ineqc(x)=-x[1]^2-x[2]^2+8;

_sqp_EqProc=&eqc;
_sqp_IneqProc=&ineqc;
_sqp_Bounds={ 0 1e256,
              0 1e256};
fn gradient(x)=(3*x[1]^2-9*x[2])~(3*x[2]^2-9*x[1]);
_sqp_GradProc=&gradient;
fn hessian(x)=(6*x[1])~(-9) | (-9)~(6*x[2]);
_sqp_HessProc=&hessian;
start={1,1};
call sqpSolve(&h,start);
```

画面表示

```
return code =    0
```

```
normal convergence
```

```
Value of objective function      7.000018
```

```
Parameters    Estimates
```

```
-----
```

```
P01           2.0000
```

```
P02           2.0000
```

```
Linear Equality Lagrangean Coefficients
```

```
.
```

Linear Inequality Lagrangean Coefficients

.

Nonlinear Equality Lagrangean Coefficients

0.00000000

Nonlinear Inequality Lagrangean Coefficients

1.5000011

Bounds Lagrangean Coefficients

0.00000000 0.00000000

0.00000000 0.00000000

Number of iterations 6

Minutes to convergence 0.00000

この場合の結果は、等号の制約が0になった以外は、以前と同じであり精度があがったとは言えません。依然として、7であるものが、7.000018などとなっています。上のプログラムのように適当に名前をつけた関数に、この場合は2変数ですから 1×2 のgradientベクトルと 2×2 のHessian行列を定義してから、それをグローバル変数_sqp_GradProcおよび_sqp_HessProcでポインタとして&をつけて呼び出します。(なお、gradientベクトルは、 2×1 というふうに転置させる必要はなくて、そのまま 1×2 のまま使います。~および|の記号でマージする際には、括弧()で各項を囲んでマージしないとエラーを引き起こしますので注意が必要です。(これは、~と|を使う際に、演算記号のある項と同時に使えないというGAUSSの文法からくるものです。)なお、sqpSolveは目的関数が多次の場合に有効な関数です。制約式はリニアであろうとノンリニアであろうと、またそれらが何本であろうと解いてくれます。(制約式が何本もある場合にはQProgのように1行1行積み重ねて行列として制約式のグローバル変数を設定します。以下がその設定の方法のまとめです。

ポイント 制約条件つき最小化問題 sqpSolve

{ x,f,lagr,retcode } = sqpSolve(&目的関数名,start);

または、call sqpSolve(&目的関数名,start);

Min 目的関数

s.t. _sqp_A * X = _sqp_B

```

_sqp_C * X >= _sqp_D
_sqp_EqProc = &非線形等号制約関数;
_sqp_IneqProc = &非線形不等号制約関数;
_sqp_Bounds = { 下限 上限,
                .....
                下限 上限 }

```

ここで、 x は解のベクトル、 f は目的関数の x での最小値、 $lagr$ はラグランジアン
のラベルとそのベクトル、 $recode$ はエラーのリターンコード。

ここで、上の線形の等号制約と不等号制約を使った例を、 $iteration$ の数や、 $gradient$ の収束の有効数字を設定するグローバル変数の使い方とあわせて示しておきましょう。今度は最初の等号制約を形どおり線形の等号制約として A と b にパラメーター設定してみます。

$$\text{Min } h(x_1, x_2) = x_1^3 + x_2^3 - 9x_1x_2 + 27$$

$$\text{s.t. } x_1 = x_2$$

$$x_1 + x_2 > = 2$$

$$2x_1 + x_2 < = 4$$

$$x_1^2 + x_2^2 < = 8$$

$$0 < = x_1 < = 2, \quad 0 < = x_2 < = 2$$

1 番目の線形の等号制約は、 $x_1 - x_2 = 0$ という形にしたうえで、また、3 番目の線形の不等号制約では、 $-2x_1 - x_2 < = -4$ というふうに等号不等号関係を -1 をかけてひっくりかえせる形にします。すなわち、 $> =$ の向きではなく、 $< =$ の向きになっている場合には、 C と d のその部分に相当する要素に -1 をかけたものを代入します。

プログラム

```

new; cls;
sqpSolveset;

fn h(x)=x[1]^3+x[2]^3-9*x[1]*x[2]+27;
_sqp_A={1 -1};
_sqp_b={0};
_sqp_C={ 1  1,
        -2 -1};
_sqp_d={ 2,
        -4};
fn ineqc(x)=-x[1]^2-x[2]^2+8;
_sqp_IneqProc=&ineqc;
_sqp_Bounds={ 0 2,
              0 2};

```


_sqp_MaxIters=100;

_sqp_DirTol=1e-3;

_sqp_PrintIters=1;

start={0,0};

{ x,f,lagr,retcode }=sqpSolve(&h,start);

画面表示

iter 1 function = 20.00000000

parameter	direction	gradient
1	1	0
1	1	0

iter 2 function = 15.74074074

parameter	direction	gradient
1.3333333	0.33333333	-6.0000001
1.3333333	0.33333333	-5.9999998

=====

SQPSolve Version 3.6.4

2/01/2002 2:00 pm

=====

return code = 0

normal convergence

Value of objective function 15.740741

Parameters Estimates

P01	1.3333
P02	1.3333

Linear Equality Lagrangean Coefficients
2.2222222

Linear Inequality Lagrangean Coefficients

0.00000000
4.4444444

Nonlinear Equality Lagrangean Coefficients

.

Nonlinear Inequality Lagrangean Coefficients
0.00000000

Bounds Lagrangean Coefficients

0.00000000	0.00000000
0.00000000	0.00000000

Number of iterations	3
Minutes to convergence	0.00000

上のように、線形の等号制約と2番目の非線形の不等号制約のgradientが非零です。すなわち、この2つによって決まってきている(2変数2方程式で解けてしまう)わけで、

$$x_1 - x_2 = 0$$

$$2x_1 + x_2 \leq 4$$

を関係をすべて等号と見たてて連立させると、 $x_1 = x_2 = 4/3$ となり、ここでの解のベクトルと一致します。

なお、プログラム後半のグローバル変数の設定は、まず、最大iteration数が

`_sqp_MaxIters=1e+5;`

とデフォルトで決まっているものを変更して、100にしてあります。設定は、指数形式でも十進法でもどちらでもかまいません。また、`gradient`ベクトルの収束の際にどれだけの桁数まで0に近づいたら計算をやめるは、

```
_sqp_DirTol=1e-5;
```

とデフォルトで決まっているのを変更して、1e-3にしてあります。また、`iteration`をすべてのステップで出力するには、

```
_sqp_PrintIters=0;
```

とデフォルトで無効にされているのを、それ以外の数字、ここでは仮に1、とすることですべての`iteration`が表示されます。以前と同じように、止まらなくなれば「C」で計算をそこでやめます。なお、リターンコードは0が正常収束ですが、ここにまとめておくと、

リターンコード

- 0 正常収束
- 1 強制終了
- 2 最大iteration回数超過
- 3 関数計算失敗
- 4 gradient計算失敗
- 5 Hessian計算失敗
- 6 ラインサーチ失敗
- 7 制約式エラー

なお、`QNewton`も`sqpSolve`もノンリニアプログラミング関係のために作られた関数ですが、計量のライブラリ`maxlik`や`cml`にたよることなく、これらでノンリニアの計量計算をまかせてしまうことも可能です。